

## 武下節山

武下節山は名を信成と称し、別に義光、文精軒、菁莪園、耕雲山人等の号（本名のほかにつけた名前）を持ち、通称は弘治と呼ばれており、家は代々留守家に仕えた家柄の儒学者である。

節山は幼い頃から学問を好み、堀籠膽水に学び椎名芝山と共に頭角をあらわし、のちに藩学（藩の学校）の立生館の教授に選ばれた。そして、堀籠膽水が仙台藩の養覧堂という学校の儒官（孔子や孟子の考えを教える先生）になってからは、椎名芝山が立生館主になり、節山はひたす儒教を教えることに努める。教えるときは、先生の学説を確信して先人が残した教えを守り、ひたすら朱子（中国の朱熹の教え）の説によって後進の啓発に努める。

節山は、心が広くて優しく、あえて人と争わず、「学問は立派な人格を育てるものであり、その基礎をつくるのが大切である。学問・芸術の浅い、深いではなく、ひとりひとりにあった教えこそが大事である。」という信念を持って教育にあたっている。のちに、

真言宗（空海が説いた宗教の教え）の儒者了天が水沢に来て、吉祥寺の住職となったが、節山の教える漢文の読みが、声の響きや音色を研究する学問に通じていると聞き、時々教えをうけたといわれている。節山は、音楽にも詳しく、書、写字にも優れていた。また、古い学もよく理解していて詳しくあった。

一八七三年（明治六年）に水沢小学校が開設された際に教師を命じられたが、しばらくして病氣にかかり、教師を辞めて静養し、もっぱら家に開いた塾で、塾生に教える日々が続いた。また、上姉体にも別の塾を開いて弟子の指導にもあたっている。節山は、少しでも疑問があると、そのまましておかないで、分かるまで調べて分かるまで教えようとする、まじめな態度は、常に子弟たちから尊敬されていた。

また、水沢の三偉人のひとりである後藤新平にかかわって、次のような逸話もある。わがままで負けず嫌いのいたずらっ子だった後藤新平を、祖父は

「父の手元で育てるよりもほかの家にやって、すぐれた人柄で、ほかの人によい影響を与えような人間になるような教育を受けさせた」と考え、当時、水沢でも名の知れた教育者で評判が高かった武下節山の家塾に学ばせたほどである。

「温容寛厚、人と争わず」と言われた節山であるが、腕白な新平にはだいたい困ったようである。後藤新平は、少年時代の先生として、節山に対し『師厳にして、然る後尊し（先生の教えは厳しいが、しかし、勉強したあとは優れた価値があるものを得るの意味）』態度を守り、従わんとする人として尊敬していた』と、思い出を語っている。

節山は、一八八九年（明治二十二年）に六八歳で亡くなっているが、その後、門下生によって大安寺境内に碑が建てられおり、「節山武下先生の碑」として残されている。

なお、門下には個性が豊かで、ずば抜けて優れた才能を発揮した人が多く、後藤新平、山崎為徳、箕作省吾、吉川鉄之助などがあげられる。

#### \*参考文献

『水沢市史 五 近代（Ⅱ）』

『歴史と観光 みずさわ浪漫』

後藤新平記念館ホームページ

水沢市

水沢市・水沢観光協会

